

地域レベルにおける農地の多面的機能開発とその効果

- 兵庫県五色町における菜の花栽培を事例として -

Development of multi-functionality of agricultural field at the local level
- a case study of growing rape in Goshiki town

武山絵美* 九鬼康彰** 三宅康成***

TAKEYAMA Emi KUKI Yasuaki MIYAKE Yasunari

1. 研究の背景と目的

農産物価格の低下や生産調整等により、農家が農地利用による食料生産に意義を見いだせず、耕作・管理放棄するケースが目立つ。これに対し、国等広域レベルでは農地の多面的機能に注目し、食料生産以外にも農地管理の重要性があることが示されてきた。しかし、洪水防止機能や国土保全機能等は、地域住民が日々の生活において実感できる機能ではない。市町村合併により行政の広域化が進む今日、「地域住民による自立的農地管理」を可能にするためには、地域レベル（ここでは集落・町レベルを想定）において地域住民が実感できる農地の多面的機能を開発・強化することが必要であると考えられる。そこで、本研究では、兵庫県五色町の菜の花栽培を事例に、地域レベルでの農地の多面的機能開発プロセス、システム、及びその効果について考察する。五色町は、淡路島中央部西海岸に位置し、日露民間外交等に多くの功績を残した高田屋嘉兵衛（1769～1827）の故郷でもある。五色町は、近年、この高田屋嘉兵衛をシンボルとしたまちづくりを推し進めている。

2. 菜の花栽培による農地利用の歴史

平成5年、町役場と花栽培住民グループは「五色町緑花推進協会」（以下「緑花協会」）を設立し、花を用いた地域活性化を展開してきた。一方、平成7年、観光施設「高田屋嘉兵衛公園」がオープンするが、これに先立つ平成6年秋、行政担当者が地元有志を募り、周辺の水田に高田屋嘉兵衛が好んだとされる菜の花を植えたのが、近年の菜の花栽培の始まりである。平成9年、町役場は、これを「菜の花街道事業」として事業化し、担い手を緑花協会としたほか、景観形成等を目的に菜の花栽培を拡大させた。平成12年、町役場は地域新エネルギービジョンを策定し、菜の花を観光、菜種油を食用に利用した後、廃食油をBDF（代替軽油燃料）として再利用するなどして資源循環型社会構築を目指す「五色菜の花エコプロジェクト」をアクションプランとした。これを受けて、平成13年、観賞用に加え、耕作放棄水田での油用菜の花栽培が開始された。平成14年、高田屋嘉兵衛公園にBDF製造プラントを設置し、園内飲食施設等の廃食油からBDFを製造して送迎車両燃料に用いている。平成15年末、町内一部地域で家庭廃食油試験回収が開始された。

3. 菜の花栽培の実施体制

菜の花栽培の中心的役割を担うのは緑花協会であり、これを他の地域資源に結びつけるコーディネート役を担うのは行政である（図1）。表1によれば、町助成金に加え、ゴルフ場客の「緑花協力金」や町内民間業者の「緑花寄付金」等民間資金が活動を支えていることがわかる。また、労働力は主にシルバー人材センターからの雇用であり、刈り入れ用機械はヤンマー農機（株）から無償貸与を受けていることなどからも、緑花協会活動が地域の多様な担い手により支えられていることがわかる。菜の花栽培水田の一部は緑花協会員の水田であるが、ほとんどはそれ以外の農家のものであり、これらは「農地維持管理作業受託」の形で小作料等の賃貸料なしで緑花協会が農家から借り入れている。菜の花のみが

* 愛媛大学農学部、Faculty of Agriculture, Ehime University

** 京都大学大学院農学研究科、Graduate School of Agriculture, Kyoto University

*** 兵庫県立大学環境人間学部、School of Human Science and Environment, University of Hyogo

キーワード；多面的機能、農地管理、地域資源

表1 緑花協会の主な収入(H14)(万円)

費目	金額
町助成金(緑花協会支援金)	100
町助成金(菜の花街道事業費)	200
緑花協力金(ゴルフ場客90円/ラウンド)	195
緑花寄付金(町内14業者から)	29
花苗等販売金	29

作付けられる場合、農家には農地管理を無料で委託できる上、転作助成金が得られるなどのメリットがある。

4. 考察

1) 地域レベルの多面的機能開発プロセス及びシステム 現在の「五色菜の花エコプロジェクト」に至る一連のプロセスに『プロジェクトの多目的化』が見いだされる。当初、菜の花栽培の目的は、「高田屋嘉兵衛のまちづくり」を通じた地域文化継承及び観光促進であった。その後、町全体の景観形成やバイオマスエネルギー生産へと発展し、近年では地域内廃食油回収等による循環型社会形成にもつながっている。このような持続可能な地域づくりを目的とした『プロジェクトの多目的化』プロセスが、農地に期待される役割の多様化をもたらし、その結果、農地の多面的機能が新たに開発されていると言える(図2)。

この『プロジェクトの多目的化』プロセスは、『地域資源の統合的活用』システムにより支えられている。つまり、町役場は、「花栽培住民グループ」から「緑花協会」を組織化し、「高田屋嘉兵衛」を「菜の花」というキーワードで「農地」に

関連付け、これを「緑花協会」に結びつけている。近年では、「高田屋嘉兵衛公園」における菜種の有効利用や廃食油活用がこれに加わるなど、町内に点在していたソフト及びハード面の地域資源がネットワーク化され、統合的に活用されている。

2) 地域レベルの多面的機能開発効果 以上をまとめると、『地域資源の統合的活用』システムの上に『プロジェクトの多目的化』プロセスが展開された結果、地域レベルにおける農地の多面的機能が開発されていることがわかった。これらの機能は、地域づくりの中から需要が発生した機能であるため、食料生産機能及びそれに付随して広域的な効果をもたらす多面的機能とは違い、農家以外の地域住民にもその重要性が認識されやすいという特徴がある。これにより、農地利用の直接的な受益者が農家以外の地域住民にも拡大し、かつそのことが地域住民等によって実感されることから、五色町では、農地管理への多様な主体(行政、地元企業、住民団体等)の参加や、農地管理に対する多様な資金の活用が、実現されていることがわかった。また、農地利用目的の公共性が増し農家の理解が得られやすいことが農地貸借を比較的容易にするという効果も生み出していることがわかった。

本研究は文部科学省科学研究費基盤研究C(2)(代表者;九鬼康彰)により実施された。また、五色町役場より多大なるご協力を得た。記して御礼申し上げる次第である。

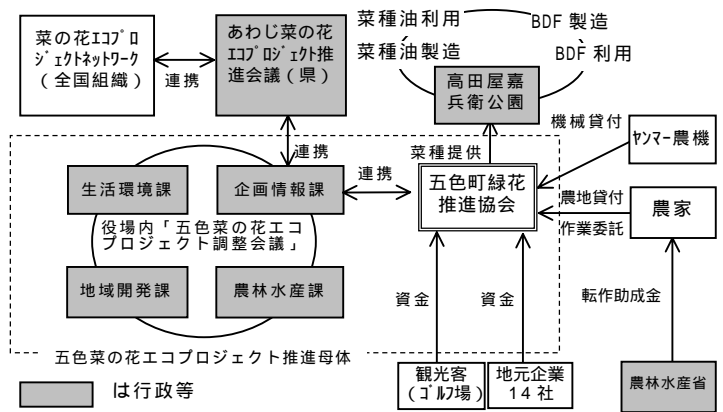


図1 「五色菜の花エコプロジェクト」実施組織

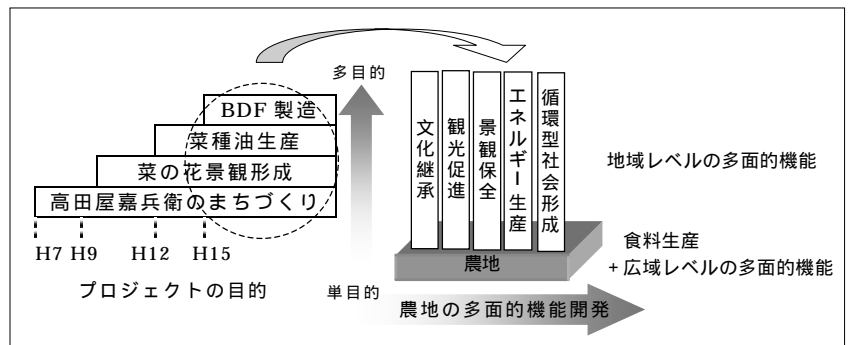


図2 プロジェクトの多目的化に伴う農地の多面的機能開発